

## 夔州時代の杜甫における華州：「憶鄭南」「秋興八首」を手がかりとして

中尾, 健一郎  
熊本大学：准教授

<https://doi.org/10.15017/1498240>

---

出版情報：中国文学論集. 43, pp.51-60, 2014-12-25. 九州大学中国文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 夔州時代の杜甫における華州

——「憶鄭南」「秋興八首」を手がかりとして

中尾健一郎

杜甫は晩年において夔州きしゅう（現在の重慶市奉節県）に流寓し、「秋興八首」に代表されるように北方を懐かしむ詩を多く作っている。懐古される土地は基本的に長安あるいは洛陽であるが、「貽華陽柳少府」（『杜詩詳注』巻十五、以下「詳注」と略記<sup>1</sup>）に「餘生如過鳥、故里今空村」（餘生は過鳥の如し、故里は今空村なり）と詠まれるように、洛陽の陸渾莊や土婁莊といった帰るべき土地は廢墟となっていたため、杜甫にとって現実的な故郷は長安と認識されていた。

ところで、杜甫が夔州において詩に詠んだ懐かしい土地の一つとして、華州（現在の陝西省華陰市）も挙げられる。杜甫が華州司功參軍の任にあつたのは、肅宗の乾元元年（七五八）六月から翌年の七月までの僅か一年余りであり、その後、棄官逃亡して長い漂泊の旅に出ることになるのであるが、それはさておき、彼が晩年に華州を回想する詩を作ったのはなぜだろうか。また彼は何ゆえに華州を懐かしく思ったのだろうか。小論では、「憶鄭南」、「秋興八首」など杜甫の北帰に関連する詩を読み解くことによって、その理由について考察したい。

## 一 華州時代の杜甫

乾元元年六月、杜甫は左拾遺より華州司功參軍に左遷された。その時の心情は、「至徳二載、甫自京金光門出間道歸鳳翔、乾元初、從左拾遺移華州掾、与親故別、因出此門有悲往事」（『詳注』巻六）に、「近侍歸京邑、移官豈至尊」（近侍京邑に歸す、官を移すは豈至尊ならんや）と詠まれている。自分を左遷したのは肅宗ではない、皇帝の側近の讒言に

夔州時代の杜甫における華州

よるものである、と心に言い聞かせながら杜甫は都長安を離れたのである。周知のように杜甫の左遷は、陳濤斜の戦いに敗れた宰相房琯を弁護して肅宗の怒りを買ったことによる。讒言もあつただろうが、杜甫の左遷は肅宗の意向であつたと見られる。長安を離れた杜甫にとつて、華州司功參軍の役職は満足のいくものではなかつたが、役所を離れて郊外に出かけ、詩興を催すこともあつた。次に挙げるのはそうした作品の一つである。

鄭県亭子澗之濱 戸牖憑高發興新 鄭県の亭子澗の濱、戸牖高きに憑りて興を発すること新たなり

雲断岳蓮臨大路 天晴宮柳暗長春 雲断えて岳蓮は大路に臨み、天晴れて宮柳は長春に暗し

巢辺野雀群欺燕 花底山蜂遠趁人 巢辺の野雀群れて燕を欺き、花底の山蜂遠く人を趁う

更欲題詩滿青竹 晚來幽独恐傷神 更に詩を題し青竹に満たさんと欲し、晚來幽独神を傷ましむるを恐る

〔題鄭県亭子〕、〔詳注〕卷六)

華州華陰県の西の鄭県で、そこに在つた亭の上層階から見える眺望に興味を覚えて詠んだものである。初句に見える「澗」は「西溪」を指す。「鄭県亭」は後に「西溪亭」と呼ばれたようである。遠くは華山の蓮華峰と長春宮(陝西省朝邑県の西北に置かれた離宮)を望み、近くは燕を追い払う雀と人を追いかける蜂を眺める。そしてさらに詩を青竹の一つ一つに書きつけようとするが、夕暮れになり「幽独」を覚えて傷心しないか心配するという。仇兆鰲は頸聯の「野雀が欺き」「山蜂が趁う」とは、衆人の誹謗により杜甫が孤立したことの比喩であり、それで「幽独」を覚えると注する。「幽独」とは、「楚辞」「九章・涉江」の「吾が生の楽しみ無きを哀しみ、幽独山中に処る」に基づく。つまり鄭県に赴いた杜甫は春景色を楽しんでいたが、雀や蜂を目にして、讒言を受けて放逐された過去の体験に思いをいたし、孤独感を覚えたというのである。当時の杜甫にとつて華州での生活は、この種の挫折感を拭いきれないものであつた。その一方で、杜甫が一年あまりの華州時代に詠んだ詩は三十三首あり、中には名作「三更三別」も含まれる。また後年の詩に詠まれるように、華州の環境は杜甫に深い印象を与えたと見られる。

杜甫の華州での官僚生活は一年あまりで終わりをむかえるが、その事情については諸説があるので簡単にふれておきたい。従来は関中における飢饉の発生による「棄官逃亡説」が定説であつたが、近年は「罷免説」「任期満了説」が有力視されている。その詳細は、松原朗「杜甫の華州司功參軍時期についての覚書」併せて関琦・王勳成の

免官説の検討」(中国詩文研究会『中国詩文論叢』第三十集、二〇一二年)に丁寧で紹介されているが、杜甫の進退を考えるにあたり鍵となるのは、杜甫の七律「立秋後題」(『詳注』卷七)に見える「平生独往願、惆悵年半百。罷官亦由人、何事拘形役」の四句をどのように解釈するかであろう。鈴木修次氏は「三吏三別」による朝廷批判により杜甫は罷免されたとし、閻琦氏は杜甫が無断で任地を離れて洛陽に赴いたことによる処罰として罷免されたと見る。

しかし、「罷官亦由人」(官を罷めしは亦た人に由る)に続く「何事拘形役」(何事ぞ形の役に拘せられん)が、陶淵明「歸去來兮辞」の「既自以心為形役、奚惆悵而独悲」(既自にして心を以て形の役と為す、奚ぞ惆悵として独り悲しまん)に基づくことを考えれば、やはり自発的に辞任したと考えるのが自然ではなからうか。丁啓陣氏が明・王嗣奭『杜臆』卷二に依拠して論じるように、杜甫と上司との関係に問題があった可能性も高い。陶淵明の退隱が督郵に頭を下げること嫌っての自発的な行動であったこと、杜詩が「歸去來兮辞」に基づいていることを考えれば、杜甫の棄官の原因に上司との軋轢があったと見ても大きくは誤らないであろう。また罷免という大きな事件によって職を失ったのであれば、杜甫が後年、華州時代を懐かしむことにはならなかったのではないかと筆者は考える。

## 二 夔州で回想される華州

杜甫が華州を回想する詩を詠んだのは、永泰二年(七六六年、十一月より大暦元年)五十五歳、夔州に来て間もない初夏であった。当時彼は次の詩に詠むように、夔州の風景に華州に共通するものを見いだした。

曾為掾吏趨三輔	憶在潼関詩興多	曾て掾吏たりて三輔を趨り、憶う潼関に在りて詩興多かりしことを
巫峽忽如瞻華嶽	蜀江猶似見黃河	巫峽忽ち華嶽を瞻るが如く、蜀江猶お黃河を見るに似たり
舟中得病移衾枕	洞口経春長薜蘿	舟中病を得て衾枕を移し、洞口春を経て薜蘿長し
形勝有餘風土惡	幾時回首一高歌	形勝餘り有りて風土惡し、幾時か首を回らして一たび高歌せん

(『峡中覽物』、『詳注』卷十五)

杜甫は盛んに詩興の湧いた華州時代を回想する。巫峽を見れば華山のようであり、長江を眺めやれば黃河を見る

夔州時代の杜甫における華州

ようだが、こゝは蛮族の蟠踞する南方の夔州である。風景は文句なく素晴らしいのだが、氣候風土が宜しくない。一体いつになったらこの時を回想して声高らかに歌う日が来るのだろうかという。杜甫の「月夜」〔詳注〕卷四に「何時倚虚幌、双照淚痕乾」(何れの時か虚幌に倚りて、双び照らされて淚痕乾かん)と詠むのと同様の着想である。ここで注目したいのは、第二句に見えるように杜甫が詩興の多く湧いた地として華州を想起していることである。前掲「題鄭県亭子」の第二句にも「戸牖高きに憑りて興を発すること新たなり」と詠まれているが、杜甫にとつて創作意欲が盛んに刺激されたのが華州時代であった。夔州の風景は、杜甫に詩興多かりし華州時代を思い出させたと見えよう。次の詩はそうした杜甫の回想を詠んだものである。

鄭南伏毒寺 瀟灑到江心 鄭南の伏毒寺、瀟灑 江心に到る

石影銜珠閣 泉声帶玉琴 石影 珠閣を銜み、泉声 玉琴を帶ぶ

風杉曾曙倚 雲嶠憶春臨 風杉 曾て曙に倚り、雲嶠 春に臨みしを憶う

万里蒼茫外 龍蛇只自深 万里 蒼茫の外、龍蛇 只だ自ら深くす (憶鄭南)、『詳注』卷十五

鄭県の南に在る伏毒寺は、清らかに川の中央に聳え立つ。水鏡に映る岩は美しい高殿の影と連なり、水の流れる音は琴の美しい調べを伴うかのよう。嘗ては明け方に杉の木に寄りかかつて風の音を聴き、春には雲のたなびく高い峰を仰いだものだ。鄭県より遙か遠く隔たったこの夔州では、優れた才能を持つ人が為すこともなく静かに隠れ住むだけである。

この詩の制作時期は永泰二年(七六六)、鄭南は華州鄭県(現在の陝西省華陰市華県)の南部である。伏毒寺の位置については『古今圖書集成』によれば、伏毒寺の所在地は『水経注』卷十九「渭水」に「西石橋水、南出馬嶺山」(西石橋水、南のかた馬嶺山より出ず)と記すところの馬嶺山である。また清・畢沅の『関中勝蹟図志』卷十二、大川附水利「西石橋水」の記述によれば、西石橋水は現在の石堤河(石堤谷水)にあたる。そうすると馬嶺山の位置は華県の南の少華山附近であり、詩中の「江」は少華山に源を発して華県の西に流れる石堤河となる。

伏毒寺周辺の環境については、劉禹錫の詩より若干知ることができる。劉詩の題に、「貞元中、侍郎舅氏牧華州。時余再忝科第、前後由華觀謁陪登伏毒寺屢焉。亦曾賦詩題於梁棟。今典馮翊、暇日登樓、南望三峯。浩然生思、追

想昔年之事。因成篇題旧寺」（貞元中、侍郎舅氏、華州に牧たり。時に余再び科第を忝なくし、前後華覲に由りて謁し、陪して伏毒寺に登ること屢しばす。亦た曾て詩を賦して梁棟に題す。今馮翊ふうけいに典し、暇日に樓に登り、南のかた三峯を望む。浩然として思いを生じ、昔年の事を追想す。因りて篇を成して旧寺に題す『劉夢得文集・外集』卷三）とあり、詩の第二句に「頻経伏毒巖」（頻りに経たり伏毒の巖）とあるので、伏毒寺は西堤河にあった中洲の巖上に建造されていたことが分かる。

杜詩の「石影珠閣を銜み」の句は難解だが、明・邵宝『杜少陵先生詩分類集註』卷十六に見える該詩の注に「石影与珠閣相含」（石影、珠閣と相い含む）とあるように、大岩と伏毒寺の水影がともに連なつて見えることを指すと考えられる。第七句に見える「雲嶠」は、南斉・王融の「遊仙詩」に見える仙境せんじやうであり、ここでは華山を指す。杜甫は華州時代に「望岳」（詳注）卷六）と題する七律を作り、その尾聯に「稍待秋風涼冷後、高尋白帝問真源」（稍や秋風涼冷の後を待ち、高く白帝を尋ねて真源を問わん）と詠んでいる。春と秋の違いはあるが、杜甫が華山を眺めて塵俗とかけ離れた世界を夢想したことに変わりはない。杜甫は華州時代には華山を眺めて現実逃避の願望を抱き、夔州では当時のことを思い出して懐かしさを覚えているのである。杜甫が夔州で華山を眺めていた頃を懐かしんだ理由としては、前掲「峡中覽物」に詠まれているように、夔州の風土に好感を持っていなかったことが挙げられるが、それと同時に官職に就いていない現在の自身に対して不甲斐ない思いを持っていたことが考えられる。「憶鄭南」の結句には、「龍蛇 只だ自ら深くす」と詠まれているが、ここでいう「龍蛇」は『漢書』卷八十七上、揚雄伝に見える「以為おえらく君子は時を得れば則ち大いに行き、得ざれば則ち龍蛇たり」を踏まえると見られる。つまりこの詩に詠まれる「龍蛇」とは、優れた才能を持ちながら世を避ける隠者である。杜甫の詩に詠まれる「龍」が杜甫の喩えであることは仇兆鰲が指摘しており、そうであれば「憶鄭南」に詠まれる「龍蛇」も隠者としての杜甫を指すと見てよい。しかし、ここで疑問が生じる。杜甫が自らを隠者と見なしたのであれば、何ゆえに彼は官僚であった頃、しかも華州にいた時期を懐古しているのであるのか。それには、永泰二年（七六六）という年が杜甫にとつて人生の転機であったことが大きく関わっていると見られる。

三 永泰二年の夔州における杜甫の境遇——郎官就任の期限をめぐって

永泰二年（七六六）、五十五歳の杜甫は、秋の夜長に君恩に報いようと焦る思いを詠んでいる。

江上日多雨 蕭蕭荆楚秋 江上 日びに雨多し、蕭蕭たり 荆楚の秋

高風下木葉 永夜攬貂裘 高風 木葉下り、永夜 貂裘を攬る

勲業頻看鏡 行藏獨倚樓 勲業 頻りに鏡を看、行藏 独り楼に倚る

時危思報主 衰謝不能休 時危あやむくして主に報いんと思ひ、衰謝にも休やむる能わず（「江上」、「詳注」卷十五）

長江のほとりに毎日雨が降り、夔州の秋はものさびしい。強い風が木の葉を吹き散らし、肌寒い秋の夜長に毛皮の衣を身にまとう。年老いた自分は功績の無いことを気に病んで頻りに鏡を眺め、世に出るべきか、それとも退くべきかと悩み、独り楼閣の欄干に寄りかかる。乱れた世にあつて皇帝陛下の恩に報いたいと思ひ、落ちぶれながらもその気持ちを押しとどめることができないという。

頸聯に見える「勲業」と対をなす「行藏」とは、『論語』述而篇に見える語で、世に進み出て道を行うことと、世から退き隠れて才能を表さないことをいう。杜甫は夔州でひっそりと暮らしながら、世に出るか、それとも否かと葛藤しているのであるが、杜甫が仕官すべきか否かを考えていることは意外に思われる。そもそも当時の杜甫は、世に出るか、世から隠れるかを両天秤にかけられるような環境にあつたのであろうか。

杜甫の最終的な官職とされる檢校工部員外郎については、従来実質的な役割を持たない「虚銜」であると思なされてきた。ところが陳尚君氏により、これが実を伴った官職であり、杜甫は永泰二年に長安へ戻れば工部員外郎の任に就くことができた<sup>⑩</sup>と考証されている。もし陳氏の説を正しいとすれば、杜甫には長安の政界に復帰する可能性が残されていたことになる。

因みに永泰二年の年内に杜甫が長安帰還を目指したならば、日程的に不可能ではなかった。同年の初秋、杜甫が唐の宗室である李瑀（李瑀）に贈った「奉漢中王手札」（『詳注』卷十五）には、「入期朱邸雪、朝傍紫微垣」（入るに朱邸の雪を期し、朝するに紫微の垣に傍わん）と詠まれている。当時李瑀は湖北の江陵に身を寄せており、暑気を避けて長安に帰還す

る時期を窺っていた。杜甫は、これから江陵を発てば、雪の降る頃には入京できると詠んでいるが、そうすると江陵から長安までの旅程は三ヶ月から四ヶ月であったと見られる。杜甫が長安に向かった場合、李白の「早發白帝城」〔李太白文集〕卷二十〕に「朝に辞す白帝彩雲の間、千里の江陵一日にして下る」と詠まれたように、夔州と江陵の間の移動にはそれほど時間はかからなかったであろうから、やはり同様の日数を要したと見てよい。したがって、杜甫にとって永泰二年は、その気になれば長安に帰ることが可能な時期だったことになる。この年の秋は杜甫が長安に帰郷することを強く意識した時期だったのであり、彼が前掲「江上」において自身の進退を真面目に考えることができたのも、帰郷を決断すれば、時期的に決行が可能だったからだと考えられよう。

ところで、上記のように永泰二年の秋に夔州を出発すれば、年内に長安に戻ることが可能だったのであるが、当の杜甫は帰還先の長安における政治状況をどのように考慮していたのであろうか。「江上」と同じ頃に作られた「秋興八首」には、杜甫の長安に対する微妙な心境が表出されている。

千家山郭静朝暉 日日江樓坐翠微 千家の山郭 朝暉静かなり、日日江樓 翠微に坐す

信宿漁人還汎汎 清秋燕子故飛飛 信宿の漁人は還た汎汎、清秋の燕子は故に飛飛

匡衡抗疏功名薄 劉向経心事違 匡衡 疏を抗りて功名薄く、劉向 経を伝えて心事違う

同学少年多不賤 五陵衣馬自輕肥 同学の少年 多く賤しからず、五陵の衣馬 自ら輕肥

（「秋興八首」其三、『詳注』卷十七）

この詩の後半四句に杜甫は、皇帝に上奏文を奉りながら功績を挙げられなかった自身と、今をときめく頭貴となつた嘗ての同学たちを對比させて詠む。杜甫の同輩が誰を指すかは明かでないが、誇り高い杜甫が彼らと対照的な境遇にあることに忸怩たる思いを懐いたのであることは想像に難くない。

聞道長安似弈棋 百年世事不勝悲 聞道らく長安 弈棋に似たりと、百年の世事 悲しみに勝えず

王侯第宅皆新主 文武衣冠異昔時 王侯の第宅 皆な新主、文武の衣冠 昔時に異なる

直北関山金鼓震 征西車馬羽書馳 直北の関山 金鼓震え、征西の車馬 羽書馳す

魚龍寂寞秋江冷 故国平居有所思 魚龍 寂寞として秋江冷ややかなり、故国 平居 思う所有り



## 〔秋興八首〕其四、〔詳注〕卷十七

「秋興八首」第三首の後半を引き継いで、この詩の前半四句は現在の長安の状況を詠む。碁盤の目のように東西南北に道路が走る長安の街では、玄宗の時代に一世を風靡した貴族や高級官僚たちが安史の乱後は没落した。いなくなつた彼らに代わつて高位に上つたのは、肅宗の即位にともなつて拔擢された寵臣たちである。彼ら新興勢力は長安の高級住宅地に住み、以前の顯官たちの邸宅を我がものとした。<sup>1)</sup>元宰相の房琯や嚴武ら旧勢力と親しかつた杜甫にとつて、新興勢力の台頭は自身の長安帰還を考えた時に、決して好ましいものではなかつたはずである。杜甫にとつて長安への帰還が不安視されるのも、それゆえではなかつただろうか。というのは、この詩の尾聯には寂寞を抱える不遇な「龍」が詠まれているからである。前述のように、龍は世を避ける隱者、杜甫の暗喩である。夔州で隱者同然の杜甫が思い描く「故国」が長安であることは言を俟たないが、「秋興八首」第五首以下で懐かしまれるのは、あくまでも過去の長安であり、当時の長安ではない。言い換えれば、杜甫が降りたかつたのは自身にとつて栄光の時代の長安であり、嘗ての同輩たちが幅をきかせるなどして帰還が不安視される長安ではないのである。

そうであれば、杜甫が帰還を願う北方の土地はある程度限られてくる。洛陽の莊園は廢墟と化し、長安も難しい。しかも長安に戻り工部員外郎に就任するには、永泰二年（七六六）のうちに帰京しなければならぬ。このような人生の岐路に直面した杜甫が思い描いたのが華州であつた。華州は左遷の地ではあつたが、官職を与えられ、時には隱遁を夢見て、悠然と華山を眺めることもできた。もちろん杜甫は本気で隱遁したかつたわけではない。杜甫が隱遁を詩に詠むのは、多くの場合現実の生活に対する不満に駆られてである。したがつて、夔州で隱遁同然の生活を送ることは、杜甫の本意ではない。朝廷から官職を与えられ、自然の好風景を愛でて、いつかは隱遁することに憧れつつ日を送る。杜甫の生涯において、現実にもそうした生活が実現できた数少ない時代の一つが華州であつた。

そのことの傍証となる作品もある。杜甫は永泰二年に雲安で作つた「寄常徴君」〔詳註〕卷十四において、「万事糺紛猶絶粒、一官羈絆實藏身」（万事糺紛猶お粒を絶つ、一官の羈絆實に身を藏す）と、雑務に追われる小官も世俗から身を隠すには丁度良いと詠んでいる。仕官が遅れ、下位に甘んじている常某を慰めているのであるが、仇兆鰲は「藏身、猶云吏隱」（身を藏すとは、猶お吏隱を云うがごとし）と黄注を引用し、ここで杜甫は小官を「吏隱」のように見なし

ていることを指摘している。仇注に従うのであれば、当時の杜甫は、多忙ではあっても公務に携わることを肯定的にとらえていたと見ることができる。事実、杜甫にとって華州時代は、郷試の試験問題を作成するなど、官吏として精力的に働いた時期でもあった<sup>①</sup>。杜甫が回想した華州は、少なくとも夔州よりは好ましく、長安から離れていても官吏として活躍できた思い出の場所であったと言えるだろう。

長安で仕官すること、あるいは夔州で隠者のような生活を送ること、その中間に位置するのが司功参軍として勤めた華州時代の生活であり、かつ「瓜時」（郎官就任の期限）が迫り、本当に長安で仕官するのかと葛藤していた頃、杜甫が楽しい思い出の場所として回想できたのが華州であった。誤解を恐れずに言えば、杜甫が夔州で求めた境地は、後年の韋応物や白居易が求めた「吏隠」であったと言える。都ではないが辺境でもなく、頭官ではないが無官でもなく、多少忙しくはあってもある程度安定した俸給が得られ、さらに盛んに「詩興」が湧き起る環境。少なくとも杜甫は永泰二年（七六六）の一時期にそのような環境に憧れ、それゆえに華州という土地とそこで過ごした生活に懐かしさを覚えて、「憶鄭南」を詠んだのである。杜甫が夔州時代に華州を詠んだことが研究史においていかなる意味を持つかを考えれば、杜甫の望郷意識が、長安に帰還しさえすれば解消できるというような単純なものではなかったことを示す点にあるだろう。杜甫が華州という長安でも洛陽でもない北方の地方都市を懐かしんだこと、それは彼の複雑な心の動きの一端をかいま見せてくれるのである。

## 注

- (1) 杜詩の原文は、清・仇兆鰲『杜詩詳注』（中華書局、一九七九年）を底本とする。
- (2) 南宋・陸游の『老学庵筆記』巻六に、「亭曰西溪亭。蓋杜工部詩所謂『鄭泉亭子澗之濱』者」とある。
- (3) 仇注の原文は次のとおり。「雀欺蜂趁、喻衆謗交侵、而一身孤立、故自傷幽獨耳」
- (4) 鈴木修次『杜甫』（清水書院、一九八〇年、一四三頁）、閻琦「杜甫華州罷官西行秦州考論」（『西北大学学报』哲学

社会科学版、第三十三卷第二期、二〇〇三年五月、九〇～九二頁）を参照。

(5) 王勳成「杜甫授官、貶官与罷官說」(『天水師範學院學報』第三十卷第四期、二〇一〇年七月)を参照。

(6) 丁啓陣「論杜甫華州棄官的原因」(『杜甫研究學刊』二〇〇三年第四期、二〇〇三年十二月、六五頁)を参照。

(7) 「唐杜少陵『憶鄭南珣』詩曰、『鄭南伏毒寺』。劉禹錫『伏毒寺』詩曰、『曾作閩中吏、頻經伏毒岩』。以今考之、即『水經注』所謂馬嶺山」(『古今圖書集成』方輿彙編職方典卷五百十三、西安府部彙考二十三、西安府古蹟考四、通志州  
県志合載、華州・伏毒寺)

(8) 王融「遊仙詩五首」其二(『古詩紀』卷六十七)に、「結實自員(雲)嶠、移讎乃方壺」と。杜甫「贈李十五丈別」(『詳注』卷十五)に、「晨集風渚亭、醉操雲嶠篇」とあり、仇兆鰲はこれに王詩を引いて「此遊仙詩也」と注する。

(9) 杜甫の「寄題江外草堂」(『詳注』卷十二)に、「蛟龍無定窟、黃鵠摩蒼天」とあり、仇兆鰲はこれに「言避亂播遷、如蛟龍黃鵠之縱遊」と注する。

(10) 陳尚君「杜甫離蜀後期的行止試探——兼論杜甫之死」(『敬畏傳統』所収、復旦大學出版社、二〇一一年)に陳氏は、杜甫が工部員外郎に就任できた期限(『瓜時』)は、およそ永泰二年であったと見なしている(一五頁)。

(11) 清・浦起龍は、この詩の頷聯は次のように「秋興八首」其三の「衣馬輕肥」を推し拈げて詠んだものだという。「三  
四、即衣馬輕肥而推広言之、以映己之寂寞」(『讀杜心解』卷四之二、中華書局、一九六一年)

(12) 谷口眞由実「華州司功參軍時代の杜甫——「乾元元年華州試進士策問五首」にみる問題意識——」(『杜甫の詩的葛藤と社会意識』所収、汲古書院、二〇一三年)には、杜甫が華州時代に、時の政治に対して切実な問題意識を持ち、精力的に仕事に励み、創作を行ったことが論じられている。